研究結果

本課題は、韓国と日本の近世村落について比較史的立場から検討するのが目的である。特に、両国の近世古文書の内容分析を中心にして、両国の近世村落の社会構造のすがたを比較しようとした。

韓国近世の村落は、慶尙道慶州の良佐洞と全羅道海南の海南尹氏家文書を中心にして検討した。また、日本近世の村落は、長野県飯田市山中村と静岡県韮山市金谷村の文書を中心に検討しようとした。しかし、こうした当初の目論見は外れ、韓国の二つの村落と日本の二つの地域を訪問し、現地調査も行ったものの、実際に論文を作成する段階になって、両国の近世の村落を比較するには、それに相応しい文書を特定し、その文書の分析に集中しなければならないことが判ってきた。そこで、本研究者は、兩國近世地域社會의 開放性-閉鎖性、平等性-不平等性をみせる文書と資料を探しだし、分析を試みた。

韓国近世における村落の開放性や不平等性を理解することができる資料としては、洞契(洞約)文書があげられる。韓国の近世村落には、国家の行政的支配力と村落の自律的支配力が共存しているが、洞契文書は、この二つの支配の有り様を見せてくれる好資料である。洞契文書を分析してみると、16世紀の洞契には身分的な差別性があらわれ、村落共同体の構成員の間の不平等な関係を見ることができる。しかし、村落共同体の姿を規定している洞契は、行政村と自然村の側面では必ずしも一致していないし、共同体の構成員は、自らが脱退しようと思えば、いつでも自由に脱退出来たし、出入りが可能であった。そうした意味では、共同体の開放性の面では、韓国のほうが日本より進んでいたと言えよう。

一方、日本の近世の村は行政の単位であり、且つまとまりが強い一つの生活共同体として、強力な自律的組織を築いている。村落の構成員は、形式的ながら、建前上の身分はみな百姓であり、村内では平等であった。もちろん、百姓の中でも庄屋(名主)や組頭、百姓代といった所謂「村方三役」は、経済的にも権力的にも村内では優位に立っていたし、また水呑百姓のように経済的、権力的には劣位の立場に置かれた百姓もいた。従って、階級的には村内の不平等性はあるものの、形式的な身分上の平等性は維持されていた。こうした事実は、村の拜見証文や村役人選挙に関わる文書から知ることができる。

一方、日本の近世の村落は、一つの地域から他の地域に自由に人の出入りが出来ないという側面があり、韓国の近世の村落と較べるとかなり閉鎖的といえる。そうした土地への束縛や拘束は、江戸時代の日本の社会の性格を規定する上で、重要な意味を持つ。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

韓國近世村落의 社會構造：慶州良佐洞을 中心으로, 金炫榮, 韓國歷史研究會 月例學術發表會, 2009年 10月 第4週 土曜日, 大宇學術財團會議室(以上 豫定)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

韓國과 日本 近世地域社會의 構造：比較史的 視點에서, 金炫榮, [歷史와現實](韓國歷史研究會), 2010年 2月(以上 豫定)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)